

ドイツ語存在表現における動詞の選択

—地理、地形に関する表現を対象に—

おかべ あみ
岡部 亜美

京都大学大学院

okabe.ami.48z@st.kyoto-u.ac.jp

キーワード：ドイツ語、存在表現、所在表現、所在動詞、地理的存在表現

1. はじめに

本稿は、ドイツ語における存在表現について、地理的、地形的な存在を表す表現（以下、地理的存在表現）を対象にコーパス調査を行った結果を報告するものである。地理的存在表現とは、特に建物や地形等の存在を表す表現である。

- (1) a. *Auf der Insel steht ein Hotel.*
on the island stand-3SG a hotel
島にはホテルが一軒ある。
- b. *Die Bibliothek ist in diesem Viertel.*
the library be-3SG in this quarter
図書館はこの地区にある。

本稿の目的の一つは、建物や地形の存在を表す表現における動詞や構文の使用が、従来の存在表現研究の枠組み内で議論できるだけの類似性を持つことを示すことである。もう一つの目的は、特に所在動詞 *liegen*（英：lie）と *stehen*（英：stand）の使い分けに関して、地理的存在表現の観点から、新たな知見を提供することである。

以下では2節で、存在表現の分類と定義を行う。また、地理的存在表現に関する先行研究を確認する。3節、4節では、コーパス調査の結果を報告する。ここでは、地理的存在表現が、従来の存在表現研究で指摘されてきたのに当てはまるような特徴を持つこと、及び、*liegen* と *stehen* という動詞の使い分けを、存在場所の観点から分析した結果を示す。つづく5節では、以上の調査を踏まえ、存在文のタイプと *liegen* と *stehen* の選択に関係がある可能性を指摘する。最後に6節で、まとめと今後の展望を述べる。

2. 先行研究のまとめと問題提起

2.1 存在表現の分類

存在表現の分類として、本稿は金水 (2006) 及び西山 (1994) を基にしたい。両研究は日本語の存在文に対して提案されている分類であるが、フランス語やドイツ語に応用させよ

うとする試みも存在する¹⁾。これを踏まえ本稿でも、これらの存在表現研究を他言語に応用させることは可能であるとの立場をとる。

まず金水 (2006) では、日本語の存在文を大きく二種類に分けている。

表1 金水 (2006) における存在文の二分類 (金水 (2006) を基に執筆者作成)

限量的存在文	特定の集合における要素の有無を表す表現。話し手の立場から下す、世界についての判断の一種。述語というより、記号論理学における存在量化詞に近い働きをする。
空間的存在文	物理的な空間と存在対象（主語の指示対象）との結びつきを表す表現。物理的な時間、空間を対象が占有することを表す出来事の一種。場所と対象を項としてとる二項述語。

さらに、それぞれの存在文は以下のように下位分類される。

表2 金水 (2006) における存在文の分類 (金水 (2006) を基に執筆者作成)

限量的存在文	部分集合文	最近、教科書以外の本は一冊も読まない学生がいる。
	初出導入文	昔、ある山奥の村に、太郎という男の子がいた。
	疑似限量的存在文	昔、太郎という男の子がある山奥の村にいた。
	リスト存在文	当時のパンの会のメンバーには、北原白秋、高村光太郎、木下杢太郎、吉井勇らがいた。
空間的存在文	所在文	お父さんは会社にいる。
	生死文、 実在文	お父さんはもういません。 ペガサスはいます。
	眼前描写文	あ、子供がいる。

このうち、東郷 (2009) が指摘するように、「初出導入文と疑似限量的存在文は語順の違いによる微細な区分」であるため、以下では「初出導入文」としてまとめて扱うこととする。また、生死文が対象とするのは有生物の生死であり、本稿の対象とする建物や地形の存在には関係しない。

これらの存在文のタイプのうち、金水 (2006) が、場所名詞句が必須であるとしているのは、基本的に空間的存在文である。一方で、限量的存在文に場所名詞句が現れる可能性を認めてもいる。以下、場所名詞句を伴う部分集合文の例を挙げる。

(2) 最近の日本に、教科書以外の本は一冊も読まない学生がいる。

(金水(2006: 24) を改変)

金水 (2006: 24) は、この例文中の「最近の日本に」のように、限量的存在文に現れる場所表現は「出来事が展開される空間を表すのではなく、対象の有無を判断する際の領域をあらかじめ設定している」と見なしている。また、このことから、このような場所名詞句を「世界設定語」と呼んで、空間的存在文に必須の項として現れる場所名詞句からは区別している。

次に西山 (1994) では、場所表現が共起するか否かを基に、存在文を分類している。このとき西山 (1994) のいう場所表現は、金水のいう世界設定語は含んでいないと考えられる点に注意が必要である。

表3 西山 (1994) における存在文の分類 (西山 (1994) を基に執筆者作成)

存在文の分類Ⅰ： 場所表現を伴うタイプ	場所・存在文	机の上にバナナがある。
	所在文	おかあさんは、台所にいる。
	所在コピュラ文	おかあさんは、台所です。
	指定所在文	その部屋に誰がいるの。…洋子がいるよ。
	存現文	おや、あんなところにリスがいるよ。
存在文の分類Ⅱ： 場所表現を伴わないタイプ	実在文	ペガサスは存在しない。
	絶対存在文	太郎の好きな食べ物がある。
	所有文	山田先生には借金がある。
	準所有文	フランスには国王がいる。
	リスト存在文	甲：母の世話をする人はいないよ。 乙：洋子と佐知子がいるじゃないか。

このうち所在コピュラ文は、動詞の種類を基準とした厳密な分類であり、西山 (1994) 自身が所在文との区別が微妙であると認めていることや、ドイツ語への適用の際に、このような動詞による分類を反映させるのは適当ではないとの判断から、本稿では特に考慮に入れないことにする。また、指定所在文は場所・存在文の一種とみなすことができる (cf. 東郷 2009: 14)。所有文、準所有文は、ドイツ語には動詞 *haben* (英: *have*) を用いた固有の所有表現があるため、本稿には関係しない。

以上のことから、両研究のうち、本研究に関わる存在文のタイプはそれぞれ以下のよう
にまとめられる。

表4 金水 (2006) の存在文の分類のうち、本稿に関わる存在文のタイプ

限量的存在文	部分集合文	最近は、教科書以外の本は一冊も読まない学生がいる。
	初出導入文	昔、ある山奥の村に、太郎という男の子がいた。
	リスト存在文	当時のパンの会のメンバーには、北原白秋、高村光太郎、木下杢太郎、吉井勇らがいた。
空間的存在文	所在文	お父さんは会社にいる。
	実在文	ペガサスはいます。
	眼前描写文	あ、子供がいる。

表5 西山 (1994) の存在文の分類のうち、本稿に関わる存在文のタイプ

存在文の分類Ⅰ： 場所表現を伴うタイプ	場所・存在文	机の上にバナナがある。
	所在文	おかあさんは、台所にいる。
	存現文	おや、あんなところにリスがいるよ。
存在文の分類Ⅱ： 場所表現を伴わないタイプ	実在文	ペガサスは存在しない。
	絶対存在文	太郎の好きな食べ物がある。
	リスト存在文	甲：母の世話をする人はいないよ。 乙：洋子と佐知子がいるじゃないか。

このうち、金水 (2006) のいう「部分集合文」は西山 (1994) のいう「絶対存在文」と同一である (cf. 東郷 2009: 15)。また、金水 (2006) には、西山 (1994) の場所・存在文に対応する分類がない。この点については、東郷 (2009) がフランス語の *il y a* 構文を対象に考察をしており、場所・存在文は、金水 (2006) のいう初出導入文 ((3)) と、狭義の場所存在文 (バナナ文、(4)) の二種類に分類できるとしている。

(3) 初出導入文

a. Il était une fois, dans un pays lointain, un sorcier méchant.

b. 昔々ある国に意地の悪い魔法使いがいました。 (東郷 2009: 30)

(4) 狭義の場所存在文 (バナナ文)

Si tu as faim, il y a des bananes sur la table.

「おなかがすいているんだったらテーブルの上にバナナがあるよ」 (東郷 2009: 47)

前者は金水 (2006: 25, 26) のいうように、典型的には物語の冒頭で特定の対象を物語世界に導入する表現である。一方、狭義の場所存在文 (バナナ文) は、「聞き手の世界知識の更新」を目的とする文であると東郷 (2009: 47) は述べている。すなわち、テーブルの上にバナナがあることを知っている話し手が、「テーブルの上にバナナがあるよ」という発話によ

って、テーブルの上のバナナの存在を談話に導入し、ひいては聞き手の自宅の様子に関する知識を最新の様態に更新するのである。この際、初出導入文との違いとして、場所存在文は、後続する談話が展開する場 ((3) の場合は物語スペース) を開くのではないという点にも、注意が必要である²。

上記の諸点を踏まえ、本稿では以下の 6 種類の存在文を区別する。なお本稿では以後、場所を表す副詞句、前置詞句を「場所句」という語で統一して指すこととする³。

表 6 本稿における存在文の分類と金水 (2006) 、西山 (1994) との対応

本稿の分類	例文	金水 (2006)	西山 (1994)
所在文	(5) Das Buch liegt auf dem Tisch.	所在文	所在文
実在文	(6) Es gibt den Garten Eden wirklich.	実在文	実在文
眼前描写文	(7) Schau mal! Da ist ein Ballon!	眼前描写文	存現文
場所存在文	(8) In der Küche sind noch Bananen.	—	場所・存在文
初出導入文	(9) Es war einmal ein kleines Mädchen, das in einem Wald wohnte.	初出導入文	
部分集合文	(10) Es gibt Studenten, die nicht bei ihren Eltern wohnen.	部分集合文	絶対存在文
リスト存在文	(11) Es gibt ein Hotel, eine Kirche, ein Rathaus, und eine alte Bibliothek in der Stadt.	リスト存在文	リスト存在文

まず所在文とは、特定の対象がどこにあるかを述べる文である。

- (5) *Das Buch liegt auf dem Tisch.*
 the book lie-3SG on the table
 本は机の上にある。

次に実在文は、想像上の実体を現実世界に位置付ける文である。

- (6) *Es gibt den Garten Eden wirklich.*
 it give-3SG the garden Eden really
 エデンの園は実在する。

眼前描写文とは、目の前の状況を、端的に描写する文である。西山 (1994) では存現文と呼ばれているが、金水 (2006) のいう眼前描写文と同一であると考えられる。名称は、眼前描写文に統一する。ドイツ語では以下の例のように、文頭に直示的な *da* (英: *there*)

を置くのが典型的である。

- (7) *Schau mal! Da ist ein Ballon!*
 Look times there be-3SG a balloon!
 見て！あそこに風船があるよ！

場所存在文とは、聞き手の知識の更新のために、対象の存在を談話に導入する文である。

- (8) *In der Küche sind noch Bananen.*
 in the kitchen be-3PL still bananas
 台所にはバナナがある。

初出導入文とは、典型的には物語の冒頭で、後続する談話の展開する場を設定し、対象の存在を導入する文である。物語世界への導入の場合、ドイツ語では典型的には *es war einmal*（英：once upon a time, there）という表現が用いられる。

- (9) *Es war einmal ein kleines Mädchen, das in einem Wald wohnte.*
 it be-3SG.PAST once a little girl who in a forest live-3SG.PAST
 昔々あるところに、森に住んでいる小さな女の子がいました。

なお、東郷 (2009) では場所存在文（広義）が初出導入文と場所存在文（狭義）を包含しているとしているが、本稿ではそのような上位カテゴリーは設定しなかった。

部分集合文とは、部分集合を言語的に設定し、その集合の要素の有無多少を述べる文である。西山 (1994) では絶対存在文と呼ばれているが、金水 (2006) のいう部分集合文と同一のタイプであると考えられる（cf. 東郷 2009）。名称は部分集合文に統一した。

- (10) *Es gibt Studenten, die nicht bei ihren Eltern wohnen.*
 it give-3SG students who not with their parents live-3PL
 両親と一緒に住んでいない学生がいる。

リスト存在文とは、先行文脈で形成された「開かれた命題 (open proposition)」に当てはまるもの（変数）を列挙する文である。

- (11) *Es gibt ein Hotel, eine Kirche, ein Rathaus, und eine alte Bibliothek*
 it give-3SG a hotel a church a townhall and a old library
in der Stadt.
 in the city
 町にはホテル、教会、市庁舎、そして古い図書館がある。

このうち、所在文、実在文、眼前描写文、場所存在文は、金水 (2006) のいう空間的存在文にあたり、場所句と共起できると考えられる。一方、初出導入文、部分集合文、リスト存在文は、限量的存在文にあたり、基本的には場所句とは共起しない。また、形式上、場所句が共起しても、それは世界設定語であり、対象の有無を評価する領域の設定を行っていると考えられる。

また、ドイツ語ではこのような存在文のタイプは、ドイツ語では動詞、あるいは構文に対応が見られる。例えば、ドイツ語の存在文 *es gibt* 構文は、所在文では用いられにくく、部分集合文やリスト存在文、実在文での使用が好まれる (Czinger 2002, Daigi 2014)。一方で、所在文には所在動詞⁴が、眼前描写文には直示的な *da* を文頭に置いた提示文が現れやすい (Kutscher and Schultze-Berndt 2007)。

以上は表 7 のようにまとめられる。

表 7 本稿における存在文の分類と場所句、動詞や構文との共起関係

本稿の分類		例文	場所句との共起	共起しやすい動詞、構文
空間的存在文	所在文	Das Buch liegt auf dem Tisch.	○	所在動詞
	実在文	Es gibt den Garten Eden wirklich.	○	<i>es gibt</i> 構文
	眼前描写文	Schau mal! Da ist ein Ballon!	○	所在動詞、 <i>da</i> 提示文
	場所存在文	In der Küche sind noch Bananen.	○	-
限量的存在文	初出導入文	Es war einmal ein kleines Mädchen, das in einem Wald wohnte.	△ (世界設定語であれば可能)	<i>es war einmal ...</i> 、 <i>es gibt</i> 構文
	部分集合文	Es gibt Studenten, die nicht bei ihren Eltern wohnen.	△ (世界設定語であれば可能)	<i>es gibt</i> 構文
	リスト存在文	Es gibt ein Hotel, eine Kirche, ein Rathaus, und eine alte Bibliothek in der Stadt.	△ (世界設定語であれば可能)	<i>es gibt</i> 構文

上の表 7 からわかるように、主に金水 (2006) のいう空間的存在文 (所在文、実在文、眼前描写文) では所在動詞が、限量的存在文では *es gibt* 構文の使用が好まれるといえる。

例外としては、空間的存在文である実在文で *es gibt* 構文の使用が好まれる点が挙げられる。実在文は、場所句との共起が可能ではあるが、基本的には明言されずに含意される。これは、何が場所句にくるかは、文脈に左右されずに一義的に決まることが多いため、あえて明言する必要に欠けるからと推測できる（例：「この世界には」）。このような場所句の必要性の低さから、実在文においては存在物の存在そのものに焦点があたりやすく、場所句を必須の項としない *es gibt* 構文の出現が多くなると考えられる。

本稿では、存在文のなかでも、形式上、場所句が出現している文を対象に調査を行った。これは本稿が、地理的存在表現における、所在動詞の使い分けにも焦点を当てているからである。所在動詞は存在場所を表す表現を、基本的には必須の項として要求する⁵。このような文との対照という観点から、本稿では場所句の明言されている文に調査の対象を絞った。

2.2 地理的存在表現に関する先行研究

ここでは、所在動詞である *stehen* と *liegen* を認知言語学的な観点から論じた Serra Borneto (1996) の記述を、地理的存在表現における動詞の使い分けに関する先行研究として確認したい。同研究は、*stehen* を人間が直立する姿勢、*liegen* を人間が横になる姿勢と結びつけ、各動詞のイメージスキーマが拡張されていくことで、それぞれの動詞の用法が包括的に説明できるとした。例えば典型的には、*stehen* は垂直軸の顕著な存在物と、*liegen* は水平軸の顕著な存在物と用いられるといわれている⁶。以下の例では、縦に長い瓶は *stehen* と、横に長い新聞紙は *liegen* と共起している。

(12) a. Die Flaschen stehen auf dem Tisch.

'The bottles are on the table.'

b. Die Zeitung liegt auf dem Tisch.

'The newspaper is on the table.'

(Serra Borneto 1996: 461)

また同研究では、*liegen* は特定の軸が長くない球状、立方体状の物体と共起することも指摘している。

(13) Die Würfel liegen auf dem Tisch.

'The dice are on the table.'

(*ibid.*: 464)

このような、どの次元にも均等に広がる物体と共起する *liegen* の特徴を、同研究は、「次元際立ちの欠如 (lack of dimensional saliency)」とまとめている。

本研究に関係のある範囲では、非認識的所在の一種として、地理的所在⁷に関する指摘がある。いわく、非認識的所在とは、(実世界ではなく) より抽象的な空間に物体を位置付けることであり、このタイプの所在では、動詞の選択に際して存在物の形状が考慮されな

くなるという。Serra Borneto (1996) は、この存在物の形状を問わないという特徴が、次元
的際立ちの欠如している場合に用いられる *liegen* の使用を喚起していると述べている。

(14) a. Frankfurt liegt am Main.

'Frankfurt is on the Main.'

b. *Frankfurt steht am Main.

(*ibid.*: 469)

また、*liegen* のこの特徴のため、眼前描写文⁸における同動詞の使用は好まれないとい
う。例えば以下のように団地アパートが存在物の場合、*liegen* の使用は非文になる。

(15) a. Schau mal dort, da stehen einige Mietskasernen am Damm.

'Look, there are some apartment buildings near the embankment.'

b. *Schau mal dort, da liegen einige Mietskasernen am Damm.⁹

(*ibid.*: 470)

これは、眼前描写文が、典型的には観察者が眼前の状況を立体的に把握していることを前
提とし、*liegen* の「次元的際立ちの欠如」という性質と合わないからである。

このような *liegen* と *stehen* の特徴は、状況を二次元的に把握するか、三次元的に把握
するかの違いであるといい換えることもできるだろう¹⁰。物体の位置を抽象的な空間にお
ける点として理解するのが *liegen* であり、物体が目にある（かの）ように、物体の高
さや奥行きが意識されるのが *stehen* である。眼前描写文という、物体の三次元的な解釈が
求められる場合に、*stehen* の使用が要求される点も、この説明を支持しているといえる。

2.3 問題提起

本稿では以上の考察を踏まえ、地理的存在表現における構文や動詞の選択について調査
を行うこととする。管見の限り、ドイツ語において建物や地形の存在を取り立てて論じた
研究は多くないので、まずは存在文や所在動詞についてこれまで提案されてきた点が、地
理的存在表現に対しても問題なく適用できるかを確認したい。また、所在動詞の使い分け
については、存在文のタイプとの関連で論じられたことは、これまでにないようである。
しかし、従来の研究が、所在動詞の用いられ得る複数の存在文のタイプのうち、存在文の
みを対象としてきたことに対する批判もでてきている (Lemmens 2002b)。この点を踏まえ、
存在文のタイプと所在動詞の関係についても調査を行った。

3. 調査 1

3.1 調査 1 の前提

本調査では IDS (マンハイム) の提供する COSMAS II というコーパスのうち、Zeit
(2000-2014)¹¹ を用いた。調査方法としては、地形や建物を表す語を検索にかけ、出現した
文例のうち、場所句と共起している文を収集した。

今回の調査で対象とした存在物は、Hotel (ホテル)、Kirche (教会)、Schloss (城)、Berg (山)、Insel (島)、See (湖) の 6 語である。これは予備調査で出現数が極端に少なくな
いもののうち、建物から三語、地形から三語を選んだものである¹²。このうち、Insel、See
は *stehen* と共起できない。

コーパスにおける各存在物の出現数と、そのうち本稿で対象とする場所句を伴う存在文
であると認められた文例数は以下表 8 の通りである。

表 8 コーパスにおける各存在物の出現数と、本稿で調査の対象とする文例数

存在物	出現数	対象となった文例数
Hotel	14178 (2916)	47 ¹³
Kirche	13314	51
Schloss	3807	30
Berg	6475	34
Insel	9140	55
See	5048	36

3.2 調査 1 の結果

以下では存在物ごとに、それが現れる存在文のタイプと共起する動詞の出現頻度を示し、
両者の関係性を探る。

まず、存在文のタイプを分類した結果を示す。

表 9 存在物ごとの存在文の各タイプの出現数

	所在文	眼前 描写文	場所 存在文	初出 導入文	部分 集合文	リスト 存在文	計
Hotel	21	0	12	2	8	4	47
Kirche	10	3	18	9	2	9	51
Schloss	9	2	14	0	1	4	30
Berg	8	2	14	2	2	6	34
Insel	28	4	12	4	6	1	55
See	6	6	17	0	1	6	36

今回の調査の対象は、基本的には実在の確かなものを対象としていたため、実在文の出
現は認められなかった。このため、表 9 には実在文を含めなかった。逆に出現が多かった
のは、所在文、場所存在文である。

次に、存在物ごとの動詞、構文の分布を以下に示す。なお、この際、*es gibt* 構文は便宜
上、動詞の一種として分類する¹⁴。また、全ての存在物において頻度が 5 例以下の動詞は、

その他に含め適宜分析することとする。

表 10 存在物ごとの各動詞の出現数

	es gibt	liegen	sich erheben	stehen	その他	計
Hotel	11	20	1	7	8	47
Kirche	12	7	1	24	7	51
Schloss	3	11	0	9	7	30
Berg	8	7	10	2	7	34
Insel	9	41	1	0	4	55
See	5	25	0	0	6	36

動詞分布の特徴としては、いずれの存在物においても *es gibt* 構文や *liegen* の出現が認められる一方、*sich erheben* や *stehen* は、存在物ごとに出現に偏りがあるといえるだろう。

つづいて、存在文のタイプごとに動詞の出現を見てみたい。まず所在文の動詞の分布を動詞ごとに確認する。

表 11 所在文における存在物ごとの動詞の出現数

	es gibt	liegen	sich erheben	stehen	その他	計
Hotel	0	16	1	2	2	21
Kirche	0	3	1	4	2	10
Schloss	0	5	0	2	2	9
Berg	0	4	2	0	2	8
Insel	0	26	0	0	2	28
See	0	5	0	0	1	6

- (16) *Der Genfer See liegt wie eine Sichel zwischen den Ausläufern der Alpen.*
 the Genevese lake lie-3SG like a sickle between the foothills of-the Alps
 (Die Zeit (Online-Ausgabe), 17.10.2013, Warum muss Joy hungern?)
 レマン湖は三日月のようにアルプスの支脈の間にある。

上の表 11 からわかるように、全ての存在物を通して *liegen* の出現が多い。特に、Hotel の場合は、*stehen* との共起が可能な存在物であるにもかかわらず、Kirche、Schloss と比べて *liegen* が出現する割合が非常に多い。存在物が Insel や See の場合は、*stehen* と共起しないこともあり、*liegen* と共起する割合が高かった ((16) 参照)。

次に眼前描写文における動詞の出現の割合を示す。

表 12 眼前描写文における存在物ごとの動詞の出現数

	es gibt	liegen	sich erheben	stehen	その他	計
Hotel	0	0	0	0	0	0
Kirche	0	0	0	3	0	3
Schloss	0	0	0	1	1	2
Berg	0	1	0	1	0	2
Insel	0	2	0	0	2	4
See	0	4	0	0	2	6

(17) *Sie sagen: Vor uns steht eine Kirche.*

they say-3PL in-front-of us stand-3SG a church

(Die Zeit (Online-Ausgabe), 03.02.2005, Unter leisem Himmel)

彼らという：私たちの前には教会がある。

存在物が *Kirche* の場合は *stehen* が現れるが、存在物が *Berg*, *Insel*, *See* の場合は *liegen* の出現も見られる ((17) 参照)。このうち、*Insel* や *See* は *stehen* と共起しないため、必然的に *liegen* の出現数が増えたと考えることができる。また、*Berg* では *liegen* の出現が見られるが、これは、山は場合によっては横幅が縦幅よりも圧倒的に大きく見えることがあるからではないかと推測される。特に、遠くに山を望むような状況では、山の垂直軸の長さが意識されにくくなり、*stehen* の使用が必然的ではなくなったとも考えられる。

次に場所存在文における動詞の出現を示す。表 13 の示すように、*liegen* と *stehen* の出現が多い。特に *Hotel*、*Kirche*、*Schloss* において、所在文よりも *stehen* の頻度が高いことがわかる ((18) 参照)。

表 13 場所存在文における存在物ごとの動詞の出現数

	es gibt	liegen	sich erheben	stehen	その他	計
Hotel	0	3	0	5	4	12
Kirche	0	3	0	15	0	18
Schloss	0	5	0	5	4	14
Berg	0	1	8	1	4	14
Insel	0	11	1	0	0	12
See	0	16	0	0	1	17

- (18) *Am Ufer steht eine leuchtend blaue Kirche, Unkraut sprießt aus
at-the bank stand-3SG a shining blue church weed shoot-3SG out
den Treppenstufen von Agios Spiridonas.
the stairs of Agios Spiridonas*

(Die Zeit (Online-Ausgabe), 15.05.2008, Die epische Insel)

岸边には輝く青色の教会がある、雑草がアギオス・スピリドナス教会の階段から芽生えている。

つづいて、初出導入文における動詞の割合を見る。

表 14 初出導入文における存在物ごとの動詞の出現数

	es gibt	liegen	sich erheben	stehen	その他	計
Hotel	2	0	0	0	0	2
Kirche	6	0	0	0	3	9
Schloss	0	0	0	0	0	0
Berg	1	1	0	0	0	2
Insel	2	2	0	0	0	4
See	0	0	0	0	0	0

- (19) *Seit 20 Jahren gibt es in Berlin-Kreuzberg das Hotel Transit,
Since 20 years give-3SG it in Berlin-Kreuzberg the Hotel Transit
ein Kollektiv mit treuen Gästen.
a group with faithful guests*

(Die Zeit (Online-Ausgabe), 22.11.2007, S. 79; Auf Durchreise im Hinterhof)

二十年来、ベルリン・クロイツベルクには、ホテル・トランジットがある、誠実な客の集まり。

存在物の種類にかかわらず es gibt 構文の出現が多い ((19) 参照)。また、Berg や Insel が存在物の場合は、liegen の出現も見られた。

次に部分集合文における動詞の分布を示す。表 15 の示すように、存在物にかかわらず、es gibt 構文の分布が顕著である ((20) 参照)。

表 15 部分集合文における存在物ごとの動詞の出現数

	es gibt	liegen	sich erheben	stehen	その他	計
Hotel	6	1	0	0	1	8
Kirche	1	0	0	1	0	2
Schloss	1	0	0	0	0	1
Berg	2	0	0	0	0	2
Insel	6	0	0	0	0	6
See	0	0	0	0	1	1

- (20) *Das perfekte Hotel gibt es in Berlin genauso wenig wie in einer anderen Stadt.*
 the perfect hotel give-3SG it in Berlin exactly few like in a other city
 (Die Zeit (Online-Ausgabe), 24.05.2007, Schlaft schön!)
 完璧なホテルは、ベルリンには、ほかの都市と同じくらい僅かにしか存在しない。

最後にリスト存在文における動詞の出現を見てみたい。

表 16 リスト存在文における存在物ごとの動詞の出現数

	es gibt	liegen	sich erheben	stehen	その他	計
Hotel	3	0	0	0	1	4
Kirche	4	1	0	1	3	9
Schloss	2	1	0	1	0	4
Berg	5	0	0	0	1	6
Insel	1	0	0	0	0	1
See	5	0	0	0	1	6

- (21) *Hinter Gössl gibt es bloß noch weiße Felswände, einen 108 Meter tiefen
 behind Gössl give-3SG it only still white rock-faces a 108 meter deep
 fjordartigen See und das Tote Gebirge, Karstlandschaft, Einsamkeit,
 fjord-like lake and the Totes Gebirge karst-landscape solitude
 bitterkalte Winter.
 bitter-cold winter*
 (Die Zeit (Online-Ausgabe), 15.08.2002, Adams Erben)
 ギュスルの背後には、ただ真っ白な岩壁、水深 108 メートルのフィヨルド様の湖、そ
 してトーテス・ゲビルゲ山脈、カルスト地形、人気のない土地、極寒の冬がある。

どの動詞も出現数が少ないが、es gibt 構文の割合が高い ((21) 参照)。

3.3 調査 1 のまとめ

以上の結果から、所在文、眼前描写文、場所存在文では **liegen** と **stehen** が、初出導入文、部分集合文、リスト存在文では **es gibt** 構文の出現が多いといえる。このうち前者は金水 (2006) のいう空間的存在文にあたり、後者は限量的存在文にあたる。この二種類に分けて動詞の出現を見ると、以下のようになる。

表 17 空間的存在文と限量的存在文に二分した場合の動詞の出現数

	es gibt	liegen	sich erheben	stehen	その他	計
空間的存在文	0	105	13	39	29	187
限量的存在文	48	6	0	3	10	67

また、空間的存在文のうち特に **Hotel**、**Kirche** のとき、所在文では **liegen** が多く、場所存在文では **stehen** が多く出現するという特徴がある。以下の表は、今回 **stehen** と共起した **Hotel**、**Kirche**、**Schloss**、**Berg** の所在文と場所存在文における、両動詞の割合を示している。

表 18 **Hotel**、**Kirche**、**Schloss**、**Berg** の所在文と場所存在文における動詞の分類

	liegen	stehen	計
所在文	28	8	36
場所存在文	12	26	38

さらに、今回の調査で出現した動詞の種類について、従来の研究では言及の無かった **sich erheben** という動詞の頻度が高かったことが特徴的であった。しかし、この動詞は主に **Berg** との共起が顕著であり、他の存在物との共起は稀であった。このことから、この動詞は一般的に頻度の高い動詞ではなく、今回、**Berg** を調査の対象の一つとしていたことで出現数が多くなったものと予想できる。

4. 調査 2

前節の調査結果からは、所在文と場所存在文という二つの存在文のタイプにおいて、動詞 **liegen** と **stehen** の出現の傾向が異なることがわかった (cf. 表 18)。しかしこの結果は、存在文のタイプに応じて共起しやすい動詞が異なることを示しているだけでなく、存在物を三次元で捉えたか、二次元で捉えたかの違いを反映している可能性もある。この点について先行研究では、**stehen** は直示的、三次元的な捉え方をしている際に用いられ、**liegen** は非直示的、二次元的な捉え方をしている際に用いられるとされていた。今回の調査で出現した文例についても、所在文では二次元的な捉え方を求めるコンテキストが多く出現したために **liegen** が、場所存在文では三次元的な捉え方を求めるコンテキストが多く出現し

たために **stehen** が、それぞれ共起しやすかったのかもしれない。そこで本節では、存在物の捉え方に影響を与えると考えられる、存在場所の大きさの観点から、**liegen** と **stehen** の出現について調査を行った結果を報告したい。この調査では、**stehen** と **liegen** と共起しやすい場所句の分類を行うことで、存在物の捉え方は、存在場所の大きさや種類と関係がある可能性を示す。

4.1 調査 2 の前提

筆者はまず、存在物を三次元的に捉えるか、二次元的に捉えるかは、場所句が表す存在場所の大きさに反映されるという仮説を立てた。二次元的に捉えるということは、話し手の視点は、高さという要素を捨象しやすい俯瞰的な位置にあると考えられる。すなわち、大陸や地域を鳥瞰しているコンテキストが想定でき、存在場所も比較的大きくなると予想できる。逆に三次元的に捉えている場合、話し手の視点はどちらかというと言明描写的な性格を帯びると考えられる。つまり、場所句で表される存在場所が、比較的小さい場所であると予想できる（図 1 参照）。

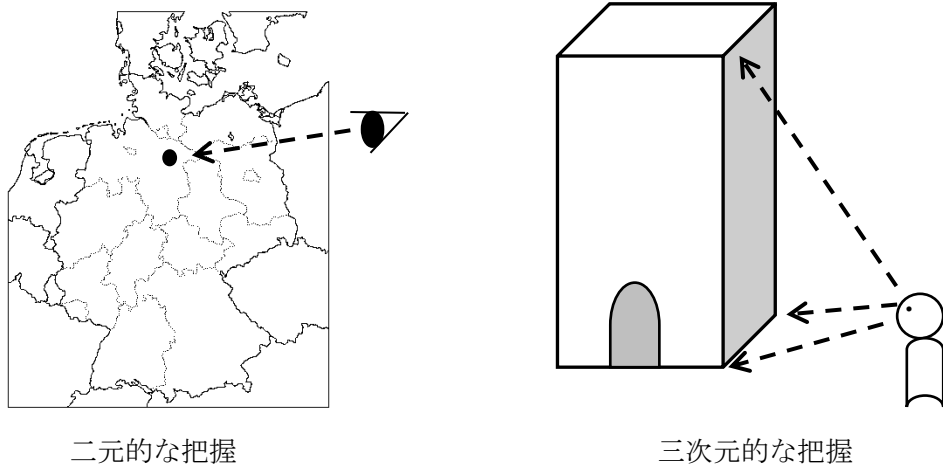


図 1 所在場所の大きさと存在物の把握方法の関係

これを踏まえると、二次元的な把握が好まれるといわれる **liegen** はより大きな存在場所と共起し、三次元的な把握が好まれるといわれる **stehen** はより小さな存在場所と共起するのではないかと考えられる。

この仮説を踏まえ、調査 1 の文例をそのまま用い、分析対象を **stehen** との共起が見られる **Hotel**、**Kirche**、**Schloss**、**Berg** に絞り、所在文、眼前描写文、場所存在文のそれぞれに現れる存在場所を動詞ごとに分類した。なお、対象となる文例数は以下の表の通りである。

表 19 所在文、眼前描写文、場所存在文における動詞の分類
(Hotel, Kirche, Schloss, Berg)

	liegen	stehen
所在文	28	8
眼前描写文	1	5
場所存在文	12	26

4.2 調査 2 の結果

以下では存在文のタイプごとに、今回の調査で現れた場所句を挙げた。

表 20 所在文における場所句の分類

	liegen	stehen
Hotel	keine 150 Kilometer von der Pazifikküste entfernt, drei Kilometer außerhalb der Stadt, im Evakuierungsgebiet, drei Kilometer vom Stadtzentrum Erzurum entfernt, hinter dem Roten Platz, etwa 10 Gehminuten von Petersplatz und Engelsburg entfernt, ein wenig außerhalb der Kulturhauptstadt, sehr nah am Bahnhof, in beliebten Urlaubsregionen, nicht weit vom Teatre-Museu entfernt, rund zwei Kilometer außerhalb am Mandraki-Strand, am Viktualienmarkt, über der Flensburger Förde, an der Uferstraße, in den Wäldern, in dem Stadtteil	in einem Pyrenäenstädtchen, am Viktualienmarkt
Kirche	in den Wiesen, zwischen dem Hotel Mancarrón und dem Hauptanlegesteg, nahe der Moschee	außerhalb des bebauten Areals, in einem Viertel, in Borna, auf Gipfeln
Schloss	in der Mark Brandenburg, auf der Schattenseite des Rheins, etwa 50 Kilometer nördlich von Carlisle, auf halber Höhe im Bergpark, im Lake District	in Teheran, auf einer Anhöhe
Berg	in Nubien, im Westen, vor uns, drei Autostunden nördlich von Boston	-

表 21 眼前描写文における場所句の分類

	liegen	stehen
Hotel	-	-
Kirche	-	vor uns, dort, auf dem Platz
Schloss	-	auf dem Golfplatz
Berg	da	draußen

表 22 場所存在文における場所句の分類

	liegen	stehen
Hotel	an der Küste zwischen Benoa Beach, auf der Halbinsel, an der Uferstraße	auf dem Landzunge, neben dem Wahrzeichen Le Havres, im Vedado, dort, in einer Bucht
Kirche	kurz vor Magdalene Bridge, hinter dem Rothschild-Bau, nur ein paar Blocks nach Westen	im Zentrum von St. Paul, am Cap, hier (3), dort (3), im Tal, im Zentrum der Stadt, in Ingjaldshóll, am Gotzinger Platz, am Ufer, auf dessen Hügel, da
Schloss	am Tihuta Pass, in schöner Distanz zur Stadt Kassel, in einem ihrer Einzugsbereiche, auf halbem Weg zwischen Teplitz und Prag, gegenüber	am einen Ende (der Straße), im Norden, in der Ebene, in Baienbühl, hier
Berg	im Süden	im Norden

stehen と共起した場所句と、liegen と共起した場所句を見てみると、stehen は、in der Stadt（町の中に）や auf dem Platz（広場に）など、町か町より小さい場所を表していることが多いといえる。また、da や dort（英：there）などの直示的な意味を持つ語との共起も多いといえるだろう。一方で liegen と共起した場所句は、比較的小さな場所を表すだけでなく、in der Mark Brandenburg（ブランデンブルク辺境伯領に）など、より大きな場所を表している場合もある。存在場所が町、あるいはそれ以下の大きさか、町よりも大きいか、あるいは直示的な意味を持つ語か、地形を表す語かという観点から場所句の出現数を分類すると、以下の表のようにまとめられる。

表 23 動詞ごとの場所句の分類

	存在場所が町以下の大きさ	存在場所が町より大きい	直示的	地形	計
liegen	14	18	2	7	41
stehen	19	4	8	8	39

表 23 からわかるように、**liegen** は、直示的な場所句とは共起しにくい、存在場所が大きい場合も小さい場合もそれなりの出現数があり、存在場所の大きさとはあまり関係がないように見える。一方 **stehen** は、存在場所が町以下の大きさを表す場所句、及び直示的な場所句と共起しやすいことがわかる。また、動詞ごとの出現数にはさほど違いがないにもかかわらず、存在場所が町より大きい場合の各動詞における出現数が、**liegen** では 18 例、**stehen** では 4 例と大きく異なっている点は注目に値する。

そこで、直示的な場合と地形の場合を除いて存在場所の大小のみに焦点を当てて各動詞における存在場所の大小の割合を出してみた。この結果、**liegen** は 12.5% の差で存在場所が町より大きい場合が多いのに対し、**stehen** は 65.3% の差で存在場所が町以下の大きさの場合が多いことがわかった。

表 24 動詞と存在場所の大小の関係

	存在場所が町以下の大きさ	存在場所が町より大きい	計
liegen	14 (43.8%)	18 (56.3%)	32 (100%)
stehen	19 (82.6%)	4 (17.3%)	23 (100%)

このことから、**liegen** はどちらかというと存在場所が町より大きい場合が好まれるようだが、**stehen** はよりはっきりと、存在場所が町以下の大きさの場合を好むようである。

また、**liegen** の特徴としては、**außerhalb** (英: outside)、**entfernt** (英: away) との共起が挙げられる。このため、**liegen** と共起した場所句は「～から何分／何キロ」といった、起点からの距離を示した表現が多い。逆に **stehen** は、町や広場など、ある程度の領域をもった空間の中に存在物を位置付けるような表現が多いことがわかる。

また、場所句が地形を表しているとき、**stehen** は **auf dem Hügel** (丘の上に) や **auf Gipfeln** (山頂に) など、高さのある地形の上に建物が建っているときに用いられやすいという傾向が見られる。

4.3 調査 2 のまとめ

本調査では、存在物を二次元的に捉えるか、三次元的に捉えるかは、場所句が表す存在場所の大きさに反映されるという仮説を立て、二次元的な把握を好むといわれている **liegen**、及び三次元的な把握を好むといわれている **stehen** のそれぞれと共起する場所句を分類した。

この結果、**liegen** は直示的な表現と共起しにくいほか、存在場所の大きい場合のほうがより好まれることがわかった。しかし、**stehen** と比べれば、存在場所の大きさにかかわらず、共起が認められる傾向にある。逆に **stehen** は、直示的な表現、及び存在場所が比較的小さい場合に現れやすい。このことを踏まえると、存在場所が直示的な場合は三次元的な把握が、比較的大きい場合は二次元的な把握が好まれるといえそうである。しかし、存在場所が比較的小さい場合は、二次元的な把握も三次元的な把握も、どちらも生じやすいと

いえるだろう。

5. 考察

調査 1 からは、空間的存在文に **liegen** や **stehen** といった所在動詞が、限量的存在文に **es gibt** 構文が出現しやすいことがわかった。これは先行研究の指摘通りであり、地理的存在表現も、従来記述されてきたような存在文の特徴を持つことを示していると考えられる。

また、場所存在文では **es gibt** 構文の出現が認められず、所在文同様、所在動詞が用いられることがわかった¹⁵。このことから、所在文を主な対象としてきた所在表現研究の成果を、動詞の用法の点で、ある程度、場所存在文に対しても適用できるのではないかと予想できる。

一方で、所在文と場所存在文という二つの存在文のタイプにおいて、動詞 **liegen** と **stehen** の出現の傾向が異なることがわかった。しかし、存在文のタイプの違いではなく、存在物を二次元的に把握するか、三次元的に把握するかの違いが、この出現傾向に影響を与えた可能性がある。そこで調査 2 として、存在物の把握方法を左右すると考えた存在場所の大きさや種類と動詞の共起関係を調べた。この結果、存在場所が比較的大きい場合は **liegen** と、直示的な表現の場合は **stehen** と共起しやすいことがわかった。その一方、存在場所が比較的小さい場合は、**liegen** と **stehen** のどちらとも頻繁に共起したことから、この場合は、存在場所の大きさは存在物の把握方法と関係ないといえるだろう。

このような存在場所の大きさに関する議論を踏まえ調査 1 を振り返ってみたい。存在物を二次元でも三次元でも把握できる、存在場所の比較的小さい場合、**liegen** と **stehen** の割合はどうなっているだろうか。

表 25 存在場所の大きさが町以下の場合の所在文、場所存在文における動詞の出現数

	所在文	場所存在文
liegen	10	3
stehen	5	12
計	15	15

数は非常に少ないが、所在文では **liegen** が、場所存在文では **stehen** が好まれる傾向があるといえる¹⁶。

一方で、所在文における **stehen** の出現、場所存在文における **liegen** の出現が完全に排除されるわけではないことも、これまでの結果から明らかである。この理由としては、存在場所の大きさが、存在物の捉え方を決める唯一の要因ではないことが考えられる。例えば以下の文は、ある村の紹介記事の末に「食事と宿泊 (**Essen und Unterkunft**) 」という見出しを設け、宿泊情報について羅列している箇所の冒頭に現れる。

(22) *Im Dorfkern liegt das Romantik Hotel Engel.*
 in-the village-centre lie-3SG the Romantik Hotel Engel

(Die Zeit (Online-Ausgabe), 02.12.2004, Wo der Weltgeist wohnt)

村の中心にはロマンティック・ホテル・エンゲルがある。

存在場所は「村の中心部」であり、町より小さいが、動詞としては *liegen* が出現している。これは、宿泊情報を羅列するというコンテキストでは、ホテルの建物を三次元的に把握するのではなく、村全体にあるホテルの情報をリストのように把握し、各ホテルの位置を地点として順番に示していくという二次元的な解釈を要求しやすいためと推測できる。

他にも、動詞の選択に影響を与えうる要因として、例えば同じホテルというカテゴリーに含まれてはいても、実際の建物が縦長か横長か、という点がある。また、存在場所の小さい場合に *stehen* と *liegen* が共に出現するのも、書き手の意識の中では二次元的、あるいは三次元的解釈がなされていた結果であり、Serra Borneto (1996) のような、存在物の捉え方による動詞の使い分けが反映されている可能性は否定しきれない。しかし、これらの点については新聞記事の記述だけでは判断がつきにくい場合が多い。存在文のタイプと動詞の関係については、今回は可能性を指摘するにとどめ、今後さらに調査を進めていきたい。

6. まとめと今後の展望

本稿では、コーパス調査によって、建物や地形を存在物とする地理的所在における動詞の選択に関する調査を行った。調査全体を通して明らかになったのは、地理的存在表現においても、所在動詞 *liegen* や *stehen*、あるいは *es gibt* 構文などの動詞の使い分けが認められることである。本調査では、前者は空間的存在文で、後者は限量的存在文に出現しやすいことがわかった。また、特に *liegen* と *stehen* 間の使い分けについては、存在文のタイプが動詞の選択に影響を与えている可能性を示した。しかし、この点を確かめるには、書かれたテキストの分析という手法では限界があることも指摘した。

今後は、アンケート調査などを行うことで、より多角的な観点から、この問題に取り組みたい。また今回は、新聞記事という、極めて限られたコンテキストを対象としていた。話し言葉や文学作品では、異なる傾向があると考えられるため、さらに調査の対象を広げていきたい。

注

1. フランス語では東郷 (2009)、ドイツ語では大喜 (2013)、Daigi (2014) 参照。
2. なお、東郷 (2009) では話し手、聞き手の双方に共有知識領域、発話状況領域、言語文脈領域という三つの領域を想定した談話モデルを用いて、「テーブルの上のバナナ」が聞き手の共有知識領域に登録される過程を詳細に説明している。
3. 形式上場所を表す表現については、金水 (2006) では「場所名詞句」という語が用い

られ、必須の項としての場所名詞句と世界設定語が区別されている。一方、西山 (1994) は金水 (2006) のいう、必須の項としての場所名詞句のみを場所表現と呼んでいる。本稿では金水 (2006) の流れを汲み、「場所句」という上位概念を設定し、必須の項としての場所句と、世界設定語を区別する。

4. 所在動詞とは、所在文において用いられる *stehen*、*liegen*、*hängen* (英: *hang*) などの動詞を指す。ドイツ語においては、Ameka and Levinson (2007) でその存在が指摘され、Kutscher and Schultze-Berndt (2007) で、それぞれの使い分けの点まで詳しく調査されているように、10 種類程度の所在動詞が存在する。地理的存在表現においても所在動詞 *liegen* や *stehen* が出現するが、同表現はこれまで、いわゆる「典型的な」所在文の延長で扱われてきたに過ぎないといえるだろう。これは、Levinson and Wilkins (2006)、Ameka and Levinson (2007) に代表されるように、従来の所在文研究では、人の手で存在場所を変えたり、向きを変えたりすることが可能な大きさの物体 (例: コップ、本など) が対象とされてきたからである。
5. 「基本的には」と述べたのは、場所表現でなくても、建物の様子を表す語が出現する場合は、文として許容されるからである (ex. *Das Hotel stand leer.* (The hotel was empty.))。
6. ここでの説明は、紙幅の都合で簡略化したものとなっている。*liegen* と *stehen* の使い分けに関するより詳細な議論は Serra Borneto (1996)、Kutscher and Schultze-Berndt (2007) を参照。
7. 本稿のいう「地理的所在」は、Serra Borneto (1996) では *geotopographical loation* (地理・地形的所在) と呼ばれている。呼称は違うが、同研究においても、町や山、建物の所在を対象としていることは例文から明らかである。このため、Serra Borneto (1996) のいう「地理的・地形的所在」は、本稿が地理的存在表現と呼ぶものと同じ存在物を対象としていると考えられる。
8. Serra Borneto (1996) は、眼前描写文は地理的所在の一種とは見なしていないようである。この理由は、筆者が眼前描写文に対して認識的、直示的なスコープを想定して説明を加えていることである。このことから、認識的な眼前描写文は、非認識的所在の一種である地理的所在とは異なるものとして扱っていると推測される。
9. このような眼前描写文では *stehen* の他に *sein* の使用も可能である (Daigi 2015: 89)。Serra Borneto (1996) は、あくまで *stehen* と *liegen* のみを考察対象としているため、*sein* が用いられ得る可能性について指摘がないものと思われる。
10. このような二次元、三次元という用語を用いた *liegen* と *stehen* の説明は、本稿では、オランダ語の所在動詞 *liggen* と *staan* の使い分けに関する説明を参考に行っている。オランダ語所在動詞に関する研究を行った Lemmens (2002a: 125) は、Serra Borneto (1996) を参照しながら、オランダ語の *het huis staat* (the house stands) では家が三次元で認識され、*het huis ligt* (the house lies) では家によって占められた面積に焦点があり、xy 座標における点として家が概念化されていると述べている。オランダ語の所

在動詞とドイツ語の所在動詞は、必ずしも用法が完全には同じではないが（オランダ語のほうが所在動詞の使用が義務的に要求される）、動詞と存在物の把握法の関係については、オランダ語とドイツ語の研究を共に参照している Lemmens (2002a) に従い、オランダ語の所在動詞に関する記述を参考にした。

11. *Zeit* とは、週刊発行の全国紙である。よって、本稿の対象は、新聞の言語に限られている。
12. この6種の存在物を選んだ基準は、本文中でも述べたように、現在のところ出現数の多寡によっている。このため、この調査自体が、今後存在物の種類を増やしていくことを前提とした予備調査であるといえるだろう。
13. *Hotel* の場合は非常に出現数が多かったため、無作為抽出で2916例を調べ、対象となる例文数が50例前後になるよう調節した。
14. *es gibt* 構文は、出現する動詞の観点からは *geben* 動詞（英：*give*）に分類されうるが、存在を表す場合は *es gibt*（英：*it gives*）という固定した形式で現れる。本稿ではこの形式を重視し、*geben* と分類するのではなく、*es gibt* と分類した
15. 今回は *es gibt* 構文が出現しなかったが、東郷 (2009) のいう狭義の場所存在文（バナナ文）において、*es gibt* 構文が出現することは不可能ではない。以下の例文は、東郷 (2009) のバナナ文を一部改変し、ドイツ語にしたものであるが、*es gibt* 構文の使用が許容される。

(i) *Wenn du Hunger hast, sind/gibt es noch Bananen in der Küche.*
 when you hunger have-2SG be-3PL/give-3SG it still bananas in the kitchen
 もしお腹が空いているなら、台所にバナナがあるよ。

なお、この点については特に、Anja Collazo さん（京都大学大学院）、大喜祐太さん（京都大学大学院）の指摘に基づいている。

16. *Hotel* が存在物の場合は、注13で述べたように無作為抽出を行っている。ここでは出現数の不足を補うという観点から、*Hotel* の全ての文例を対象とした場合の動詞と存在文のタイプに応じた出現数の結果を挙げておきたい。具体的には、*Hotel* が存在物の場合で、今回の分析には含まれなかった42例を、表25に加えた。これを加えても、やはり所在文では *liegen* が、場所存在文では *stehen* が現れやすい傾向があるといえる。

表 i 存在場所の大きさが町以下の場合の所在文、場所存在文における動詞の出現数2

	所在文	場所存在文	計
<i>liegen</i>	34	11	45
<i>stehen</i>	8	19	27

ただ、この結果は、ホテルが存在物の場合がデータの大半を占めるという点で、表 25 の結果を補足するものであるという扱いに留めたい。

略号一覧

PST past

PL plural

PRF perfect

SG singular

2 2nd person

3 3rd person

参考文献

- Ameka, Felix K., and Stephan Levinson C. 2007. Introduction, The Typology and Semantics of Locative Predicates: Posturals, Positional, and other Beasts. *Linguistics* 45 (5/6) : 847-871.
- Cztinglar, Christine. 2002. Decomposing Existence: Evidence from Germanic. In Werner Abraham, Jan-Wouter Zwart (eds.), *Issues in Formal German(ic) Typology*, 85-126. Amsterdam: Benjamins.
- 大喜祐太. 2013. 「スイス式標準ドイツ語非人称存在表現の諸相— *es hat* と *es gibt* の対立をめぐって—」『言語科学論集』19: 103-125.
- Daigi, Yuta. 2014. Untersuchung der Existenzkonstruktionen *es hat* und *es gibt* im Schweizerhochdeutschen. *Sprachwissenschaft Kyoto* 13: 39-56.
- Daigi, Yuta. 2015. Existenzkonstruktion als Sprechakt - Akzeptabilität der *es gibt*-Konstruktion -. *Germanistik Kyoto* 16: 77-96.
- 金水敏. 2006. 『日本語存在表現の歴史』東京: ひつじ書房.
- Kutscher, Silvia, and Eva Schultze-Berndt. 2007. Why a Folder lies in the Basket although it is not Lying: the Semantics and Use of German Positional Verbs with Inanimate Figures. *Linguistics* 45 (5/6) : 983-1028.
- Lemmens, Maarten. 2002a. The Semantic Network of Dutch Posture Verbs. In John Newman (ed.), *The Linguistics of Sitting, Standing, and Lying*, 103-139. Amsterdam: John Benjamins.
- Lemmens, Maarten. 2002b. Tracing Referent Location in Oral Picture Descriptions. In Andrew Wilson, Paul Rayson, Tony McEnery (eds.), *A Rainbow of Corpora – Corpus Linguistics and the Languages of the World*, 73-85. München: Lincom-Europa.
- Levinson, Stephan C., and David P. Wilkins (eds.) 2006. *Grammars of Space – Explorations in Cognitive Diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 西山佑司. 1994. 「日本語の存在文と変項名詞句」『慶應大学言語文化研究所紀要』26:

115-148.

Serra Borneto, Carlo. 1996. *Liegen* and *stehen* in German: a Study in Horizontality and Verticality. In Eugene H. Casad (ed.), *Cognitive Linguistics in the Redwoods: The Expansion of a New Paradigm*, 459-506. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

東郷雄二. 2009. 「フランス語存在文と探索領域—意味解釈の文脈依存性と談話モデル—」
『会話フランス語コーパスによる談話構築・理解に関する意味論的研究』日本学術
振興会科学研究費補助金研究成果報告書.

(<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/papers/existential.pdf>)

コーパス

IDS Mannheim, COSMAS II.

The Use of Verbs in Geotopographical Expression in German Based on the Results of Corpus Studies

Ami Okabe

This paper aims to clarify how verbs are used in existential expressions when the located entities are buildings and topographical objects. The classification of existential sentences in this paper is mainly based on the researches of Kinsui (2006) and Nishiyama (1994). In Section 2, existential sentences are defined and the literature of locational verbs is mentioned. In terms of typical verbs which are used in existential sentences, as Serra Borneto (1996) mentions, the usage of *liegen* and *stehen* can be distinguished in the following way: *liegen* is used when the entity is perceived from a two dimensional perspective, and *stehen* is used when it is perceived as a three dimensional object. In Section 3 and 4, the results of the corpus study are examined to demonstrate that the existential *es gibt* construction and locational verbs are used differently from a viewpoint of the classification of existential sentences. Namely, *es gibt* construction is used especially in the case where the sentences are epistemic. On the other hand, the locational verbs *liegen* and *stehen* are used in spatial sentences. Moreover, the two locational verbs tend to prefer locational sentences and existential-locational sentences respectively, even when the results on the relation between the verb choice and the size of location (in Section 4) are considered. Section 5 analyzes the results of the preceding two sections comprehensively, and Section 6 offers a summary of this paper as well as its further prospects.